

満ち満ちてゆく日常生活：作業の力を引き起こす

ボンジェ・ペイター

首都大学東京

作業科学や作業療法の文献には、当事者にとって意味のある作業を可能にする目標に向かって、様々な戦略から構成されたアプローチが提案されている。そのような典型的アプローチの実施は、当事者にとって健康な生活やウェルビーイングのために、「作業の力」を十分に活用しているかという疑問を生じさせる。本論文では、行動の中のナラティブ（Narrative-in-Action）方法論とトランザクション論（相互浸透論）を媒介（手がかり）にして、人々のおかれている日常の生活とセラピューティック場面から、機会がどのように生じるのかを探る。そのような計画されていない機会を活用することは、人々が病気や怪我の後、自分らしい生活への移行中であるとしても、そして、まだ達成されていない長期的な目標があるとしても、彼らが満足できる生活に近づくだけでなく、むしろ、彼らがそれによって健康やウェルビーイングを経験することになりうる。

作業科学研究, 12, 2-13, 2018.

キーワード：高齢者，作業，トランザクション論・相互浸透論，日常活動，ナラティブ，行動の中のナラティブ

The 21th Occupational Science Seminar, Tsuyoshi Sato Memorial Lecture

Occupying Daily Life: Evoking the Powers of Occupation

Peter BONTJE

Tokyo Metropolitan University

Occupational Science and Occupational Therapy literature support a way of working based on planning strategies towards goals of enabling meaningful occupation. However, do our prevailing approaches of creating future possibilities make full use of the powers of occupation in support of persons' health and well-being? In this paper Narrative-in-Action methodologies and transaction theory are used to translate research findings into an alternative, additional approach. This paper will explore how possibilities arise from daily life and therapeutic situations. Recognizing these, often unplanned, emerging opportunities and bringing its' possibilities into reality can have various benefits. In addition to bringing people incrementally closer to a daily life they find fulfilling, it can provide people with experiences of health and well-being, even while in the midst of recovery from a disabling illness or injury.

Japanese Journal of Occupational Science, 12, 2-13, 2018.

Keywords: Japan, daily activities, narrative, narrative-in-action, occupation, older adults, transaction

序文

2017年12月9日に大阪で開催された第21回作業科学セミナーで発表した佐藤剛記念講演を通じ、いくつかの考えを共有できたことに、私は恐縮している。この講演で、佐藤先生の作業科学と国際化の遺産に敬意を払えることを大変嬉しく光榮に思う。

本論文は、身体障害のある高齢者と彼らを支援する作業療法士のいくつかの自分の質的研究(物語り)に基づいている。高齢者の研究にも関わらず「作業の力を引き起こす」ことに関しての推論、分析をすることは、大人や子供など他のポピュレーションにも役に立つと思う。

なお、本文中の研究参加者名はすべて仮名である。

はじめに

本論文の目的は、人々の健康とウェルビーイングのためにどのように作業を利用することができるのかという本質的な次元である「作業の力を引き起こす」ことを提案することである。数十年前から提案された様々な作業の定義(吉川, 2008: p10)を考慮すると、作業に関する色々な理解が明確になるが、作業の力を引き起こす次元が未発達である。例えば、作業は、人々が日常生活の中ですること(セルフケア, 生産, レジャー); ひとりですることだけではなく、他の人と共にすることもある; 人々が自分の意志でする(願望的な)ことと要求に対応とする(義務的な)ことなどがある。また、作業は、文化的、個人的な意味を持ち、時間を占有したり、毎日の生活を構成したりするものとされている。そして、作業の形態は(作業が)どのように観察されるのかという自分の目で確認できると、作業の機能は(その作業が)どのように役に立つかということと、作業の意味は、(その作業の)経験や成果物であることとした作業の形態、機能、意味の分類(Larson 他, 2003)が前述の様々な理解をうまくまとめていると言えるだろう。そして、「意味」は、間違いなく作業科学と作業療法で最も価値を見出すべき特徴だろう。即ち、作業は人々の生活や人生に意味と目的をもたらす、健康とウェルビーイングを(より)良くする鍵である(ISOS, undated; WFOT, 2012)。

しかし、このような作業を定義する様々な説明は、作業がどのように健康とウェルビーイングを良くするかという疑問に十分にこたえていない。

作業と健康・ウェルビーイングとのつながりに関する文献は、作業的参加・従事、適応、アイデンティティ管理、作業や役割の遂行能力の達成・熟練など概念を提供して

いる(Wong 他, 2015)。このような概念は、例えばOTの治療とか何かのプロセス後の個人レベルのアウトカムとして、健康とウェルビーイングの代わるメタファー(隠喩)として提供されている。しかし、健康とウェルビーイングの経験をどう促進するのかは明確にされていない。言い換えれば、作業への参加・従事がそのような経験をどう促しているだろうか?だから、人々が療法への参加や日々の作業を行うにつれて、健康とウェルビーイングがどう達成されたかを説明する言葉や表現が必要である(Larsson-Lund 他, 2017)。それが「作業の力を引き起こす」であろう。

力:

行動する能力又は効果をもたらすもの(潜在力, 効力)何かを達成するまたは何かが起こるようにする力量。(oxford dictionaries や merriam-webster のオンライン辞典を基に作成)

「作業の力」と私がいうときには、人々の健康とウェルビーイングに影響する力量・効力を意味する言葉として使っている。言い換えれば、「作業の力」を引き起こしたり、達成したりする作業の可能性を示唆している。しかし、「どのようにそれができるか」を論議する前に、まず、「作業の力とはなんだろうか」ということを提案したいと思う。作業的ニーズ(Doble 他, 2008; 高木他, 2018)、健康とウェルビーイングへの作業の影響(Townsend 他, 2007; Wilcock 他, 2015)、作業の意味(Hasselkus, 2011; 吉川, 2008)の文献を参考にしながら、下記にある作業の力を提案できる。(しかし、文献を調べて、このような作業の力を確認できるが、完全なリストとは思わない。一方、健康とウェルビーイングを(より)よくする作業の力を検討するには、下記のリストは十分だと考えられる。)

- 作業は人を時間に結びつける
 - (新たな)将来をイメージする
 - 過去・現在・将来をつなぐ
 - 時間をかけて、毎日の生活を構成する
- 作業によって創出された習慣とルーチンが日常生活を容易にする
- 作業は人を世界とつなぐ
 - 人々を他の人々や場とつなぐ
 - 社会関係資本, ネットワーク, 支援を開発・維持する
 - 役割の開発と管理の一助となる
- 作業は自己表現や承認を与える

- 作業は成長と変化を促進する
 - 能力やエージェンシー（働きかけ）、アイデンティティ管理を促進する
 - 技能や能力の試しと挑戦
- 作業は人生に意味を与える
 - 精神性・スピリチュアリティ、社会的意義、目的意識、一貫性体験
 - 感情を引き起こす（達成感、自分自身を活用する、楽しみなど）
 - フロー体験
- 作業は人々の健康と生存に貢献する（個人～人類）
 - 衛生、飲食
- 作業は回復 / 治療効果を有し得る
 - 気分が良い、活力を得ること、生きがいを得たり、維持したりする
- 作業は、～～を参加・従事する機会を与える
 - 上記のことをもたらす手段

上記のリストを考えると、作業科学研究者や作業の研究活動を行なっている人々は、世界中でそんなに大きくないコミュニティであるが、ここまで作業を理解できるようになったことに誇りをもっていると思っている。Molineux (2011) は、このような知識があるので、作業に基づいた実践ができるようになったと指摘している。そして、医学モデルの「作業遂行に必要な心身機能の回復・向上」の戦略だけでなく、「遂行技能・能力の習得・獲得」、「代償方法の導入」という戦略も存在してきた (Fisher, 2009; Molineux, 2011)。また、最近では、日常生活の中であろう (Pierce, 2009) とセラピューティックな状況であろう (Eide 他, 2017; 坂根他, 2016) と、ほとんどの作業が他の人々と一緒に行われる「共作業」(co-occupation) であると認識され、参加型の戦略が開発されている。また、スティグマや汚名、貧困の問題、差別など満たされていない人権の問題に対する作業的公正の確保を目指す戦略も開発されている (Stadnyk 他, 2011)。つまり、このような様々な展開によって、意味のある作業を可能にする洗練された幅広い戦略が生み出された。しかし、,

それは、私たちが提供できる最高のものでしょうか？

自分の研究結果を振り返る中で、研究参加者（日本の高齢者や作業療法士）が、上記の戦略と異なると思われる方法で行動をしているように見えることがあり、疑問を持ち始めた。時々、彼らの行動は、将来のある目

標に向う行動の道筋として多くの戦略を計画する典型的なアプローチには合わなかった。時には、彼らは望ましい状態に近づく（予期せぬ）新たに出現された機会を生かしたり、状況を変えることによって望ましくない経験を避けて、問題をきたす状況を回避していたりした (Bontje 他, 2016)。したがって、目標に向けた行動の道筋として、いくつかの戦略を計画するアプローチに疑問を感じざるを得ない。

別の言い方をすると、目標を設定し、目標を達成するために有効と思われるいくつかの戦略を決定し、目標が達成されるまでこれらの戦略を実行するようなやり方は効果的だが、問題もある。このインプット→結果の直線的な考え方は、医学モデル思考の残物であろうか？すなわち、このようにしたら、作業を可能にすることは将来に達成されることになるので、健康とウェルビーイングを経験することを待たなければならなくなるのではないだろうか？しかし、入院中であっても、在宅であっても、病気や怪我から回復している人々も健康やウェルビーイングを経験することを支援するために、彼らのおかれている日常の作業を使用したらよいのではないだろうか？そうすると、クライアントが自分の人生の非常に不確かな（移行理論によれば、限界的である）経験を減らす可能性もある。人生、日常生活、作業における紆余曲折の性質（すなわち、状況と運勢の変化）を主張する文献や自分の研究結果は、目標に向けた行動の道筋として色々な戦略を計画する典型的なアプローチ以外のアプローチの必要性を示唆している。

だから、作業のパワーを引き起こすことを無視してはいないか、という疑問を検討することから始めよう。例えば、次のような質問：

- 「目標に向けた行動の方針として、いくつかの戦略を計画する典型的なアプローチ」以外の有効的な方法があるのだろうか？
- 作業の力を引き起こすアプローチはどのようなものだろうか？
- 作業の力を引き起こすというアプローチを表現するための有益な理論はどれか？

意味のある目標に向けた典型的な行動の方針

作業の力を引き起こすアプローチを提案する前には、まず、意味のある作業を可能にする典型的なアプローチを考えよう。このアプローチの短所をいくつかを示しており、重要である。ポイントは、この典型的に採用されている目標に向けた行動の方針に反すると主張することではない。

実は、その方針がないと、セラピューティック関係性や日常生活などの意味がなくなると考えている。しかし、将来にある目標を追求するアプローチにはいくつかの欠点があると私は主張している。これらの欠点は、目標が遠い将来に達成される時や目標達成のためのアプローチが石に刻まれている（変更できない）とき、恐れである。この欠点を説明するのに、研究参加者のナラティブを使用する。

三島氏、80歳代の男性、中国地方の農家の方である。不全四肢麻痺であり、発症から2年半の時点で、彼が週に3回通っているデイケアセンターで入院から今現在の在宅生活までの生活を取り戻した経験に関してインタビューした。彼の物語の中心は、歩行能力を再獲得する彼の目標についてだった。特に、半年後に予定している温泉への家族旅行のときに、温泉ホテルの日本庭園でも歩いて楽しむというような目標をもっていた。確かに、温泉リゾートへの家族旅行は、意味のある作業であり、自立して歩くことは、価値のある目標であると考えらるだろう！

自立して歩くという困難を乗り越える彼の努力が、彼の話の主なテーマだった。例えば、発症後の入院中に、担当医に歩けるほど回復はできないと言われたと仰っていた。しかし、彼は頑張って、家でも、デイケアセンターでも、毎日練習したお陰で、車いす移動から卒業して歩行器で歩行できるようになり、今現在杖歩行に向かって進んでいた。いわゆる、歩行訓練が日常の大切な作業になった。彼は、温泉への家族旅行までに歩けるようになるという目標を達成できる自信を持っていた。

三島氏が実際に温泉に行ったときの状態は、インタビュー後のことだったのでわからないが、車いすや歩行器を使わず自力で、車からホテルまで歩いたり、庭で散歩しながら楽しさを楽しんだりする目標を達成した喜びと満足度を私たちは想像することができるだろう。次の日の朝食で、奥さん、長男、（長男の）お嫁さんから、「お父さん・おじいさん、できたよね！よく頑張ったね！」と声をかけられ、その目標を達成した満足感が出てくるだろう。これまでのところ、行動計画（歩行訓練）がうまくいき、大きな成功につながる。

しかし、三島氏の物語は、意味のある作業を目指すという目標達成につながると考えられる行動計画を実行する典型的なアプローチの有効性に疑問を呈するものでもある。その疑問を明確にするために、旅行から家に帰ってから、最初の朝をイメージしてみよう。三島氏は歩くこと目標を達成したため、歩行訓練という作業を継続する

必要性がなくなった。奥さんと一緒に、「今から何をするのか？」という話になるだろう。要するに、目標は達成するときに達成感や満足感はあるが、その感情はすぐに減退し始めるという目標に向けた行動方針の欠点が示される（Jullien, 2004）。目標は達成するのが大変であり、最善を尽くすことで信じられないほどの達成（感）を生み出すことができるが、目標を達成する上での達成の経験は、遅かれ早かれ衰え始めるだろう。三島氏の場合、歩くこと目標を達成した後、彼の日常生活に意味と構造を与える作業は何だろうか？

また、旅行は、明らかに毎日行われたい。したがって、三島氏の物語で明らかな別の問題は、意味のある作業は、必ずしも充実した日常生活につながるわけではないということである。また、旅行先での歩行は、回復のためのメタファーとして理解することができるが、彼は歩行能力の練習と同様に、限られた手の機能の練習をしていなかった。このようにしても、歩くという目標を達成することは、充実した日常生活を達成することにはつながらなかった。

もう1つのシナリオを考えることが可能である。もし、歩けるようになる目標を達成できなかったと想定しよう。退院後の生活に家族の必要な介助に対して「大事にされた」と仰っていたので、温泉旅行に行ったときにも、家族の介助で庭、温泉、食事など色々な経験を満足したと思われる。しかし、旅行から帰った後では、目標が達成できず、3年間の努力をしたけど無駄な努力になったと認識し、大きな落胆または失望を感じるかもしれない。このような可能のあるシナリオにおいてももう一つの問題に触れる。つまり、目標を達成するための行動計画（戦略）が無効になるリスクがあるので、どんな計画でも、目標が達成される見込みを考慮する必要がある。

さて、成功しないシナリオの可能性ではあっても、作業の力から利益を得る三島氏を観察することができる。例えば、歩行訓練のルーチンは彼の日々に構造を与えたり、彼に助言・励みをしたセラピストを含むデイケアで知り合った方々と彼をつなげたりした。また、彼は自分自身を英雄として表現することができ、回復をするための努力を（研究者を含む）他者に認められた。

しかし、彼の努力は、温泉旅行後の日常生活や歩行能力が取り戻されたときに、どのように生きるかをイメージすることに彼を結びつけなかった。要するに、アイデンティティ管理や作業の遂行能力の促進などを十分行わないことや、将来の生活のイメージを進展させないことに対する代償を払うリスクを冒した。三島氏自身と彼を支援する人々がデイサービスや日常生活にある機会を十分に生かした

ら、そのリスクを回避できただろうが、彼の物語の中でそのような対応は発見されなかった。

ここまで、「作業の力を引き起こす」というアプローチに到着した。

作業の力を引き起こす

引き起こす：

思い起こすまたは呼び起こす（アイデア、感情、記憶など）；推論する（原則）または解釈する（意味づける）；

反応を引き出す。

(oxforddictionaries.com, merriam-webster.com のオンライン辞典を基に作成)

研究参加者は、何度も、意味のある作業を可能にする計画された行動を通じて目標を追求する方法ではなく、別の方法で行動した (Bontje 他, 2016)。これは、おかれている状況の中で（予期せぬ）新たな機会を特定し、その機会を活用して現実にもたらすアプローチである。それは、高齢者の日常生活に埋め込まれたアプローチであり、このアプローチは、作業療法士の経験においても明らかであった。OT の高齢者のクライアントが将来のある時点ではなく、現在の生活の質を主に改善し、健康とウェルビーイングを経験できる状況を作り出した。他の例では、このアプローチは、高齢者が目標を達成するために好ましい方向に一步進むのを助けた。このようにおかれている状況での可能性を活かした経験は、計画した将来の目標に向けた行動の道筋の代わりにアプローチの存在を示唆する。ここでは、日常生活あるいは OT の場面から生じる（潜在的）機会を特定し、その機会を現実にもたらす行動（またはストラテジー）を示す。このアプローチは、引き起こすことに基づいている。

例えば、高齢者クライアントの作業を可能にする支援をテーマとした作業療法士のフォーカスグループのディスカッションにおいて、カヤコさんが共有した“進行した関節リウマチのあるクライアントに活動を提供した”といった経験は一つの例である (Bontje, 2015)。活動の必要性に関して、カヤコさんは2つの理由を説明した。まず、“体がまあどンドン動けなくなってきた、今までみたいに家事はできなくなって、えっと、今度はちょっとその家族の、一緒に住んでいる家族の中で、介護される側になってきて…失われてしまったものが大きいかなあというふうに思っていた”。そして、療養病棟に長期入院したクライアントの入院の生活の質をよくしたかった。したがって、カヤコさんは、そのクライアントがすることが

必要だという考えで、“その方のリウマチを持っている中でも、身体を使ってできる作業が少ないなっていう中で…一つとして、アイロンビーズを提供した”。そして、カヤコさんが次の結果を語った、“結構ビーズ自体もでき” “結構ビーズ自体もできて、…ビーズがもう何個も作品ができていっていくうちに段々こうスタッフの人からとかビーズを頼まれるようになったりとか、他の患者さんからこれを作ってくれないかとかこう頼まれるようになったりとか…なんか今までその人の人生には無かった、えっと新たな一面みたいなのが見れてきて…アイロンビーズの先生みたいになった！”

この展開に関しては、工芸作品をすることを楽しむこと以外に、例えばアイロンビーズの能力の発達、先生とアーティストという新たな役割とアイデンティティの獲得、他者との繋がりなどが出現する他の可能性（作業の力）を特定した。それらが現実にもたらされることを予想していたかどうかをカヤコさんは語らなかった。クライアントの変化に対するカヤコさんの驚きから、彼女にはこの作業の色々な力に対する暗黙・潜在的な意識があったと理解することができる。

この理解は、これらの展開に対するカヤコさんと他のフォーカスグループ参加者の反応によって支えられている。まずは、カヤコさんはそれを“偶然だ”と言った。しかし、フォーカスグループのユミコさんとツトムさんは、このクライアントにクラフトをうまく導入したことは偶然であるということに疑問を呈した、“作業をすることは発見をもたらす。だからその作業療法は偶然ではないよ”。そして、作業をすることを通して可能性を発見できることを、もう一人のメンバーであるヒロコさんは、“そういう、作業を提供したりすることがあるが、どこに到達したらよいかわからない場合が多いよね”と言った。この作業療法士のコメントの解釈としては、作業療法士が作業の力が現れてくることに心を開いて、そのあとでこれらの力を認識して利用したというようなプロセスであったと思われる。

だが、可能性を発見し、現実にもたらす状況を作り出すという「作業の力を引き起こすアプローチ」に関する知識体系を誰も参考にしなかったことは興味深い。そして、作業の導入プロセスの到達点を想像できないというヒロコさんの結論に、フォーカスグループの誰も議論しなかった。また、このようなアプローチの意図的な採用方法に関しても話し合われなかった。私にとっては、このような状態が作業の力を引き起こすアプローチに関する知識や（それを表現する）言葉の不足を示しているように思える。一方で、私は、暗黙の知識（＝暗黙知）として存在している

だろうということでは、作業の力を引き起こすアプローチを説明したり、意図的に採用したりすることができるようになるための理論の提案を続けたいと思っている。

「作業の力を引き起こす」ための理論的リソース

本論文で提案する作業の力を引き起こすアプローチは、Jullien (2004, 2007) のエフィカシー (効力) の理論と、行動の中のナラティブ (Narrative-in-Action) (Alsaker, 2009) や Deweyan の相互浸透論・トランザクション論 (Alsaker 他, 2013) から作成された作業的な視点 (Njelesani 他, 2014) に基づいている。

まず、健康とウェルビーイングの維持・向上にも作用する (Jullien, 2004; 2007) エフィカシー (効力) に関する論文 (哲学的な専門書) からインスピレーションを受けている。彼の著作が自分の研究結果から作業の力を引き起こすアプローチを開発することを助けた (Bontje, 2015 ; Bontje 他, 2016 ; Bontje 他, 2018)。このフランス人の哲学者がエフィカシーに関する二つのアプローチを並置している。1つは、可能性を創造する行動 (ストラテジー) から構成された計画を通して人の将来の目標に向かおうと努力するアプローチ (例えば、三島氏の歩行機能を再獲得するための歩行訓練) である。Jullien は、このアプローチは古代ギリシャの哲学者のエフィカシーや健康・ウェルビーイングに関する考えに根ざしていることと、現代医療における有力なアプローチであることを指摘している。間違いなく、このアプローチが OT 実践と三島氏の話の中でも優勢なモードである。

一方、Jullien (2004, 2007) は健康とウェルビーイングを日常の生活のプロセスの中で維持向上させる機会も説明している。このアプローチは Tao (道) に根ざしているアプローチとして説明されている。このもう一つのアプローチは、目の前と今現在の状況に従い行動をする。また、カヤコさんなど研究参加者の物語 (OT 過程) の中でもこのアプローチは明らかだった。だから、設定した目標を達成するための決まった行動計画を頑張ることと異なり、おかれている現実の生活あるいはセラピューティックな状況で生じた可能性を実現するために行動するこのようなアプローチは、可能性を認識し、現実に変えるように行動する特徴がある。このようなアプローチが「作業の力を引き起こす」と考える。

このようなアプローチが、例えば人々が日常の作業および OT に参加するとき、どのように機能するかを理解するためには、作業的な視点を反映する言語と推論方法が必

要である (Njelesani 他, 2014)。今回の作業的な視点の中心は、人々が与えられた文脈とどのように交流し、経験しているかに注目することである。ここでは、Alsaker 他 (2013) が提案したナラティブの中の行動という方法論と Dewey の相互浸透論・トランザクション論の組み合わせを引き出すことができる。ナラティブの中の行動方法論の中心は、人々が日常の作業で意味づけを行うだけではなく、(行動も意味を表している) 人々が作業に従事している最中に意味が規定され行動 (遂行) されることにある (Alsaker 他, 2009)。また、意味づけのナラティブ機能は、可能性の識別をもたらしたり、行動が現在と過去の経験が人の未来のイメージを繋いだりすることである。Dewey のトランザクション論は、どのように人々の行動や経験がある文化・社会的状況と相互作用 (相互浸透) するかの理解を促進する (Alsaker 他, 2013)。状況が人の行動を引き起こす (機会を特定する) ことと、様々な動機や価値観が人の行動の方向性を具体化する (機会を活用する) ことにポイントがある。ナラティブの中の行動によって、人々の行動や意味づけはある状況で生成され、関係者によって共同創造され、社会文化的価値観やモラルによって形作られると表現できるだろう。

結論としては、(クライアントの新しい役割を創造し、それを実現にもたらしたカヤコさんの物語を分析したように) 人々の行動の意味を関係的に理解することは、日常生活やセラピューティックな場面に参加する人々に埋め込まれたアプローチの一環として、どのように作業の力を引き起こすのかを検討するのに役立つと考えられる。

作業の力を引き起こす

理論背景を検討したので、次は、作業の力を引き起こすことを、どのように意図的に使用するのかを検討したい。カヤコさんの物語を考えると、そのアプローチの日常生活やセラピューティックな場面に参加する人々に埋め込まれた特徴を垣間見ることできる。アプローチを使用することの中心は、視点をシフトさせることである。このアプローチでは、長期的な目標と、何らかの行動計画を通じてそれを達成する方法には焦点を当てない。私たちは目の前の状況に集中する。そうして、下記のような疑問を考えよう:

- 作業にはどのような潜在的な可能性があるのだろうか?
 - 人々が参加している作業、あるいは今から参加するかもしれない作業の潜在的な可能性は何であろうか?
 - OT のプロセスに隠れている潜在的な可能性を含む。

• これらの可能性を活用し、それを現実にもたらすことは人にとって有益であろうか？

- その人が望んでいる状態に一步近づくだろうか？(トランザクション論の用語では、エンド・イン・ビューに近づいていく、ナラティブの用語では:サスペンス・未決定にあるものの解決に貢献する)。

まとめると、作業の力を引き起こすことで、人々が健康とウェルビーイングの経験を得ることができるだろうか。(それが活力を高める経験だろう(Bontje, 2012).)

作業の力を引き起こすアプローチが OT プログラムに陥っていたあいまいさを解決した

ここからは回復期リハビリテーション病院の作業療法士であるヨウコさんのナラティブに目を向けよう。計画通り OT プログラムの実施が難しくなった物語であった。彼女は、この危機を乗り越えるために、脳梗塞に遭った高齢者のクライアントと娘とのチャンスミーティングを機に、共同でプログラムを見直し、適応することで生まれた機会を利用した。少し無意識だったかもしれないが、ヨウコさんが何をしたのか、そして自分のイニシアティブから現れたことに対する省察から、「作業の力を引き起こすアプローチ」がどのように見えるかを垣間見ることができる。

ヨウコさんは、“評価っていうのも1日2日で終わるんじゃないくて、常に評価をしていくものやと思って、さりげなく会話の中で聞く”と自分の方針を説明してから、自分の経験を語り始めた。また、あるクライアントと一緒に目標をディスカッションして決めてから、とりあえず、在宅生活でしなければならないので、ADLができるようになる基礎動作訓練とADL練習で退院に向けていった。(この高齢者のクライアントは、入院前と同様に娘との同居生活に戻る予定であった。)一般的な方針にしたがって、入院リハビリは3ヶ月かかると予想されていた。しかし、“約6週目にクライアントが、もうこのような訓練(基礎動作訓練やADL練習)はしんどいし、私の体にはそんな力はないというふうに訴えた”。それで、“目標は共有できたんだけどなかなか目標を達成するために積極的に動けなくなった…一週間二週間過ぎていくので、退院間に合うかな？”ヨウコさんは不安になり、OT過程の中身がなくなったと説明した。

これまでのところ、ヨウコさんの物話から何がわかるだろうか？興味深いことに、もしヨウコさんが本当にさりげなく話をしながら評価することを信じていたら、なぜクライアントの負担が大きすぎると感じた気持ち(活力源がなくなっ

たこと)を認識しなかったのだろうか？また、ヨウコさんは2週間進歩していないという事実思い悩んでいた。分析に基づいて、ヨウコさんは在宅生活に向けてADLの自立を目指す計画と様々なストラテジー(訓練や練習)の優位性を保っていたというふうに解釈できる。さらに、この展開は、クライアントが健康とウェルビーイングを経験し、希望と期待をもつ代わりに、無力感を経験することにつながるものとして理解することができる。言い換えれば、ヨウコさんが潜在的な可能性(作業の力)が現れてくることに心を開いていなかった。

しかし、無意識かもしれないけれども、ヨウコさんは作業の力を引き起こして、苦境から抜け出す道を見いだした。日常の生活についてさりげなく話をしながらこの危機を乗り越えていく展開をヨウコさんは語った。まず、ヨウコさんは、娘さんが母親のお見舞いに来たという作業の機会を掴んだ。続いて行われた会話で、彼女らは可能性(作業の力)を特定し、現実にもたらすことを開始した。

ヨウコさんは、“今までの生活、病気になるまで、どうやってたか教えてくださいと聞いてみて、そして、クライアントが、私もう全然、今そんなんでできなくなってるなど答えた”。それで、“生活への焦りを言い始めて、あ、ここポイントやって思って”というふうに語った。ヨウコさんが語り続けて、病気になる前の生活を全部書き出したのと、今の病院の生活も全部1日の表にどんなふうに過ごしているか書き出してもらった。クライアントが結果を見るときに、かなり、私ってこんなに病人してるのっていうふうにおっしゃった”。そして、“どんなふうにこの患者さんが家に帰ったときに…機能的じゃなくて…どんなお母さんでいて欲しいですかというふうに伺った。ちゃっちゃかしてた人やからね…いつも友達と遊んでたわよねっというふうにクライアントと娘さんが答えた。外に出て行きたいですか、そうね、ちょっとはね、話し相手誰もおらんしね、じゃあどうしたいですかって言って、クライアントが娘さんと話して、デイサービスに行こうって”。それに続いて、ヨウコさんはどのように共同的に再計画したOTプログラムに同意したかを報告した。体力をつける(!)とか、車椅子をこぐ腕力をつける(!)とか、食器洗いや料理の一分ができる様になるうとか、ADL練習をしようというようなものに変わっていった。退院した後の生活を一個一個やって、自信をつけていこうっていうふうに、変わっていった。

さて、このナラティブは、作業の力を引き起こすアプローチの例として、どう理解できるだろうか？ナラティブ論とトラ

ンザクション論によって知られる、色々な理解を提案できる。

まずは、クライアントの現在の存在を過去と将来の可能性に結びつけるトピックについて、ヨウコさんは会話を開始した。結果としては、クライアントが初めて、自分の日常生活について話をし、自分が患者に変わったと自覚した。ヨウコさんはこれを将来の可能性のあるイメージを作成する機会である認識した。これは、ヨウコさんがクライアントの認識を促したとき、新たな機会を利用する転換点（重大な事態）となった。日記に一日の生活を書いてもらったことがきっかけで、娘の援助でクライアントは自分の将来をイメージできるようになった。クライアントは身体機能を越えて注目することを奨励され、過去の生き方をどのように将来の日常生活に変えるかを考えた。

さらに、クライアントは2ヶ月近く入院リハビリ経験をしてきたことに注目できる。したがって、リハビリの初期段階での初期評価とは対照的に、病院の保護的環境ではあるものの、この時点では障害と共に生きた経験があった。必然的にクライアントは退院後の生活についてスタッフや他のクライアントから話を聞いたと思われる。これも彼女の将来の生活をイメージする助けになったに違いない。

イメージを開発することは、意味づけするという課題をもたらす。つまり、障害と作業とのつながりを理解することは、単に遂行の問題ではなく、人が様々な経験をすべて理解するように任せられ、意味づけすることでもある。このような現象を考慮すると、アイデンティティを管理する（病人であることを振り払う）こと、他の人や場所（友達、デイサービス）とつながること、自分の健康を維持すること（活力を与える経験）といった作業の力を引き起こすことができるようになる。これがまさにヨウコさんが意図的にまたは暗黙に達成したものだと私は主張する。また、クライアントと娘とヨウコさんはOT過程の意味を共同で再構築したことによって、クライアントが自己表現すること、習慣（料理、友達と出かけること）を主張することで自分が認められること、目的意識を開発する（外出の慣れ親しんだ娯楽を再確立すること）といった作業の力を経験できた。

結論として、娘がお母さんのお見舞いに来たという作業は、進行中のOT過程に埋め込まれた作業の力を引き起こすことを促進した。お見舞いに来た娘の存在は、ヨウコさんがさりげない会話しながら評価する信念に基づいて行動することを可能にした。しかし、ポイントは、3人でのやりとり（トランザクション）が、現実にもたらされる可能性を特定することにつながったということである。それで、クライアントは身の回りの活動（ADL）と身体的なスタミナ

を取り戻すプログラムに再び同意した。また、デイサービス参加や家庭での調理関連活動への参加に向けて準備する新たな課題が追加された。

変更されたOT過程は、クライアントの未来を過去に結びつけ、意味を持つようになった。特に引き起こされた作業の力は、クライアントの過去との結びついた未来のイメージを開発し、アイデンティティを管理し、日常のルーチン（デイサービスの参加）を再現し、これらがクライアントの努力に意味を与え、徐々に彼女のOTに対してのモチベーションを高めた。その結果、OT戦略の助けを借りて、新しく開発されたイメージを現実のものにするために、クライアントは新しいエネルギー（活力）を得た。

心のリハビリだ

次は、関西の都市に一人暮らしている国谷という87歳の未亡人の日常生活に根ざしていたナラティブである。子供を二人育てたり、内職として洋服を作ったり、旦那の親を世話したりした生活史に自慢を持っていた。国谷氏は心筋梗塞で2回、その後心臓手術のため入院し、入院は全部で3回あった。医学的な対処は行われたが、退院の後で、家の掃除、買い物など心臓に重い負担をかける作業を行うために週に2回ほどホームヘルパーの支援を受けていた。しかし、週に2時間の2回の家事支援しかなかったため、ほとんどの時間は一人で生活し、“独りぼっちなのでかなり寂しいですね”と国谷氏が言った。さらに悪いことには、ご主人が定年になったときに、長男の家族とともに住めるように、三階建ての家に立て替えた。歳をとったら長男に入居してもらって、自分を世話してもらおうような発想だったが、長男はそうにはしなかった。国谷氏の一番の心配は、心筋梗塞の再発症と死ぬことではなく、死んでいたとしても見つけてもらえないことだった。しかし、それにもかかわらず、国谷氏は、現在の生活には満足していて、さらに長生きしたいと思っていると述べていた。国谷氏は、自分の日常生活に埋め込まれた作業の力を引き起こしながらそのような苦しみを軽減したことがデータ分析からわかってきた。さて、作業の力を引き起こすことは、彼女が幸せになるようにどのように助けたか？

国谷氏は、正面玄関にあった植物を世話しているときに、近隣の人々に挨拶がされることから、“私が家の周りに植物を育てるならば、私が植物を世話しているとき、隣人が毎日私に気づくだろう”というアイデアを得た。また、彼女は近所の人が朝の散歩に通る可能性がある

高い時間帯である早朝に植物の世話をし始めた。このことは、彼女の姿が見られなく植物の世話がされていないときに、近所の方々が安否を確認してくれる工夫となっただけではなく、近所の方々と交流の機会にもなった。更に、家のある空き駐車場スペースで近隣住民団体にリサイクル品（金融資源になった古い紙、缶など）を保管させたり、他の日に定期的な宅配サービスを利用したりする工夫で、人との交流を増やし、お昼や午後にももし彼女が人々を玄関に迎えに行かなければ、誰かが緊急支援サービス呼び出してくれることを担保した。また、“これは、もう一つの孤独感の対策ですね”と言った。

これらの工夫から、再生可能な物資の保管、植物の栽培、宅配物の受け取りの作業における可能性を国谷氏が感じていると理解することができる。別の言い方をすると、彼女は医学的な治療とホームヘルパーの支援で心臓の状態を管理したが、毎日生活の流れで起こっている作業に潜在する解決策を見つけて、薬やホームヘルプサービスではサポートできない自分の状況を管理した。特に彼女は安心感を得て、孤独体験を減らした。作業の力の面では、習慣や生活のルーチン、世界とのつながり、時間とのつながりが特に国谷氏に精神健康や社会的ウェルビーイングを向上させた。

次に、彼女が自分の全体的な健康とウェルビーイングをよりよくするためにどのように作業の力を引き起こしたかを説明する。国谷氏のケアマネージャーは、彼女の孤独感に対する解決策として、新しい小規模のデイサービスセンターを紹介した。このデイサービスセンターのアクティビティプログラムの一つの特徴は、利用者が行うことができる色々な手芸にあった。デイサービスセンターに通い始めてから、デイサービスの同利用者の一人が絵を描く専門的な技能を使って自主講師の役割を務めたことに気づいた。彼女は絵を描いた経験がなかったが、チャレンジし、水彩画を始めた。デイサービスの同利用者の指導の元で、彼女は徐々に絵を描くスキルを磨いていった。

私は、ある日、国谷氏が水彩画を描く様子を観察するために、デイサービスセンターに伺った。国谷氏はできた水彩画を先生に見せて色々なアドバイスを受けていた。彼はその絵を一目見て、水彩画の技を彼女に説明するために水彩画に手直しを始めた（彼は失語症のため口頭で説明することが難しかった）。彼が手直しを終えたとき、彼女は礼儀正しくお辞儀をして感謝を表し、水彩画を彼女の場所があるテーブルに持ち帰った。テーブルに座っていた他の4人の利用者たちは、絵を見ることを楽しみに見上げた。国谷さんは席に座らず、絵を全員に見せることで応えた。そして、国谷氏は満面の笑みを浮かべて、

“まったく違う、私はとても幸せだ”と言った。他の人は“かわいい”や“とてもいい、本当に美しい”などと叫んで、“水彩画のコピーがほしい”と言った。国谷氏が代金をもらうかもしれないとジョークで答え、絵をスキャンしてコピーを渡すように他の人に指示した。

また、私が国谷氏の家を訪ねに行ったときに、玄関の壁に飾られた水彩画を見せてくれ、“これは私の絵じゃありません。娘の絵です”と国谷氏は説明した。彼女は、関東に住んでいる娘さんが自分と同様の趣味を持っていて、描いた絵をお互いに郵送して、届いたものと必要なスキルについて電話で話をすると聞いた。国谷氏はいつも早く寝ていたが、19時くらいまでその電話をして、寝る前に経験する寂しさを軽減した。その後、水彩画（その他の工芸品）に魅了されたことを振り返って、“それは心のリハビリですよ”と“今の生活には満足しています。これからももっと生きたいです”と発言した。

国谷氏のナラティブの中では、作業の力がいくつかのやり方で引き起こされた。まず、ケアマネージャーは、国谷氏が常に手芸に関心を持つ女性であったため、どのデイサービスセンターでもよかったわけではなく、手芸に関するアクティビティプログラムが豊富なデイサービスセンターが特に適していると判断して導入したと思われる。絵を描くインストラクターの存在は偶然であったと考えられるかもしれないが、国谷氏は新たな手芸の習得機会をつかみ、共に現実にもたらした。心のリハビリと生きがいに関する国谷氏の発言から、この努力が彼女の健康とウェルビーイングの経験の源であると理解できる。

また、国谷氏はデイサービスを利用し、新たに手芸のスキルを磨くことで、過去との馴染みのあることと成長・発達を経験できたと考えられる。また、国谷氏はデイサービスの利用者と水彩画の美しさを共有したときに、多くの人との繋がりを経験し、星のように輝いた。新しい情熱を娘と共有することは、娘とつながることと孤独を減らすことだけに影響したと理解することは不十分である。絵を描く楽しさと水彩画の美しさを他の人と共有することは、彼女の健康感やウェルビーイングを高めるものであるとみなすことができる。

結論として、上記のヨウコさんとクライアントのナラティブのように、国谷氏は作業の力を特定し、実現化をした。しかし、国谷氏の物語では、これは意味のある作業を可能にする遂行能力は再獲得されなかった。むしろ、彼女は身体的な虚弱をそのまま維持しながら、自分の毎日の生活の質をよくするために、ある機会を特定し、これらの

可能性を現実にもたらすことで、安心感と活力が増す経験をした。彼女は日常の生活の流れから進化されたルーチン的な作業と創造的な作業に参加しながら、色々な可能性を現実にした。その結果、毎日の作業を利用することにより、国谷氏は生きがいを取り戻したり、自分の日常生活の質を向上させたりした。

考察：作業の力を引き起こすアプローチに向けて

本論文では、人々の日常の生活やセラピューティックな状況に組み込まれた機会を利用する戦略を提案した。ナラティブ論とトランザクション論から発想し、研究の結果から具体例を示して、「作業の力を引き起こす」アプローチを概説した。

作業の力を引き起こすアプローチに向けて、長期目標を達成するために戦略を決めて、行動計画をそのまま実施するというようなアプローチに疑問を呈した。つまり、計画が目標を達成するのに有効であるという前提は間違っている可能性がある。あるいは、目標が達成された後すぐに目標達成の満足度が低下し始めるという現象がある。また、意味のある作業を可能にすることは、満足度のいく意味のある生活を生み出すことにつながるかもしれない。最後に、長期的な目標に重点を置くことは、少なくとも目標が達成されるまで、人の日常生活を保留にして、限界状態（不確かな状態）に置かれる経験をその人に残してしまうかもしれない。

これは、私が行動計画を遵守しながら長期的な目標を追い求めることを断念すると言っているわけではない。まったく反対で、人生の生きがいは人生の目標を持つことと密接に関連しているものである。また長期計画に欠けている治療を望む人はいるだろうか？したがって、目標をあきらめることを主張しているわけではないが、少なくとも「石に刻まれている」状態にしてはいけない。さらに、状況の変化のため、私たちが従っている行動計画は、もはや最も効果的ではなくなるかもしれないということを定期的に確認することが強く勧められる。また、日々の生活やセラピューティックな状況の中では、人々の健康とウェルビーイングを高めるために、予期せぬ現実をもたらせる可能性のある、よりよいさらなる機会が提供されることもある。

何より、人々の日常生活やセラピューティックな状況に埋め込まれたアプローチとしての作業の力を引き起こすことは、人々のおかれている状況から生じる機会を活用するという利点がある。可能性を感知し、それを現実にもたらすために行動することによって、人々は段階的に心に描かれた状態に近づくことを経験する。これは活力を与え

たり、自信を与え、希望を生かし続けたりするものとして経験される。さらに、これは、慢性的な疾患・障害があっても、病気や怪我から回復最中であっても、健康やウェルビーイングを経験する可能性を高める。

これは、作業の力を引き起こすことが優れたアプローチであると主張するものではない。このアプローチにも、不利や欠点がある (Jullien, 2004 ; 2007)。例えばこのアプローチは、制限・制約から解放される世界に対して対峙することは難しい。それに加えて、自分自身を發揮し、目標を達成することの喜びに欠けるかもしれない。最後に、生きていく過程で立ち往生し、他所で利用できる重要なリソースから利益を得られないリスクもある。結論は、人々の意味のある作業を可能にし、満足度のいく日常生活を再建し、彼らの健康とウェルビーイングを管理する上で、人を援助するには両方のアプローチを慎重に使用することがおそらく最適であろう。

作業の力は、個人の日常の生活や作業療法士とクライアントの共作業にある可能性として考えられる (坂根ら、投稿中)。この点で私は作業的可能性 (occupational potential) という概念を無視することはできない。作業の力を引き起こすことは、Asaba 他 (2010) の作業的可能性の概要と共通点がある。Asaba 他は、作業の可能性を従来通りに単に個人の将来の能力としてではなく、人々が作業に参加するときに出現する潜在力として説明している。しかし、彼らの推論は、作業遂行を中心としながら、意味のある作業の遂行と、特定の作業を遂行するための能力要件に対する個人の遂行能力の一致を可能にすることを依然として強調している。作業の力を引き起こすことは、作業的可能性と似ているが、能力や健康状態また回復段階に関わらず、活力を回復したり、自信を与えたり、満足させられたりする経験につながることも主張している (Bontje, 2015 ; Bontje 他, 2016 ; Bontje 他, 2018)。最後に、作業的可能性が有益なもの存在を強調しているのに対して、特定された機会に基づいて作業の力を引き起こすことは、これらの可能性がどのように現実にもたらされるかを示唆する。作業的可能性に比べ、作業の力を引き起こすアプローチは、意味のある作業を可能にすることと、それが健康とウェルビーイングをどうよりよくするのかについて、より具体的なアイデアを提供する。

さて、最後に、次のような疑問が提起されるだろう：作業の力をより積極的に引き起こすために、人々や作業療法士に知らせる知識と言語があればどうだろうか？日常生活や OT の過程に埋め込まれたそのようなアプローチを、

どのように効果的に使用できるようになるだろうか？ OT では、作業の力を引き起こすことはどのように実践されるだろうか？

まずは、作業の力の発見を促す行動の中のナラティブやトランザクション論・相互浸透論のような見方・考え方を提案できる。すなわち、これは作業の力を引き起こすことを、意味と可能性を確立するという観点から捉える推論方法を提案する (Hasselkus, 2006 ; Josephsson 他, 2006)。

我々は、作業の力が何であるかを理解するために、必須の資源として作業の意味と作業の可能性に関する知識を利用する。探求と省察をする心は、おそらくまだ暗黙知である知識に対する気づきを促進することに役立つ (カヤコで見たように)。

そして、急性期、回復期、慢性期・生活期という段階で考えることを辞めるだろう。その代わりに、急性期にも回復期にも生活があるので、その期間も生活期とみなす。だから、私たちは、障害と障害を引き起こす (病院や他の制度的な) 環境のために制限されていても、クライアントをいつでも、どこでも、日常生活のある人とみなす。

また、意味のある作業と健康・ウェルビーイングは、将来のことを目指して達成されるだけでなく、毎日の生活が健康状態または他の状態によって制約され、障害のある病気または障害から回復している最中でさえ、追求され、経験され得る。また、我々は私たちの目の前で現れるセラピューティックな状況と日常的な状況を注視し、力の特定を容易にするために私たちの心を開く。

さて、普遍的に適用可能な実践モデルの考え方ではなく、実践モデルの使用は、最も適切と思われる特定の問題または目標に慎重に適用される。作業の力を引き起こすアプローチを促進するために、我々は、推論をナラティブ的およびトランザクション的な考え方に基づいて立てる。これは、新たに発見された可能性を現実にもたやすため、または将来的に新しく開発されたイメージに対応するために、セラピューティックなプログラムまたは人々の日常生活の再構築を再開することをもたやすこともある。

最後に、Pierce (1998) と Dickerson (2000) は、作業を強力にするためにいくつかの前提条件を私たちに思い起こさせてくれる：魅力さ、損なわれていないこと、目標の適合性である。作業は、喜び、生産性および / または修復を提供するものとして人を魅了する必要がある。人は、それを自然で本物のものとして認識し、経験しなければならない。そして、最終的に、作業は意図的なものとして経験されるために、人々の意図と一致しなければならない。

これまで、本論文で、一般的な人と特に障害を持つ人の生活に組み込まれたアプローチを提案した。また、そのようなアプローチを OT に組み込むことができるかもしれないと主張した。この「作業の力を引き起こす」アプローチは、出現された機会を特定し、その可能性を現実にもたやすという行動から構成されたことである。意味のある作業を可能にすることだけではなく、慢性的な疾患・障害や病気・怪我から回復最中の状況であっても、健康とウェルビーイングの経験を提供できるアプローチである。また、意味のある作業を可能にし、将来の健康やウェルビーイングを達成するために計画された戦略から構成されている現在普及しているアプローチとは対照的に、より充実した生活に向けて、一步一步進むアプローチでもある。

そのようなもう一つのアプローチを説明する知識と言語を開発することは、特に重要である。また、本論文の導入における作業の力の概要は、「建設中」とみなされるべきである。作業の力を引き起こすアプローチを一緒に開発しませんか？

謝辞

自分の考えを明確に述べるために様々な視点から助言をくれた Liz Townsend, Glen Edwards, 田村由美, 安斎哲也, 山田優樹, 高木雅之に感謝致します。この論文の英文をダウンロードするのに、www.researchgate.net で Peter Bontje のページにアクセスしてください。博士論文は、<https://openarchive.ki.se/xmlui/handle/10616/44786?show=full> からダウンロードできます。

文献

- Alsaker, S. (2009). *Narrative in action: Meaning-making in everyday activities of women living with chronic rheumatic conditions*. (Ph.D. thesis), Norwegian University of Science and Technology, Trondheim, Norway.
- Alsaker, S., Josephsson, S. & Dickie, V.A. (2013). Exploring the transactional quality of everyday occupations through Narrative-in-Action: Meaning-making among women living with chronic conditions. In Cutchin, M.P. & Dickie V.A. (Eds.) *Transactional Perspectives on Occupation*. New York: Springer. pp. 65-77.
- Asaba, E. & Wicks, A. (2010). Occupational Terminology: Occupational potential. *Journal of Occupational Science*, 17(2), 120-124.
- Bontje, P. (2015). *Unfolding familiarity: Re-occupying daily life among older persons with physical disabilities, in*

- Japan. (Ph.D. thesis), Karolinska Institutet, Stockholm, Sweden. Retrieved from <https://openarchive.ki.se/xmlui/handle/10616/44786?show=full>
- Bontje, P., Alsaker, S., Asaba, E., Kottorp, A. & Josephsson, S. (2018). (Re-)Establishing familiarity: Resumption of occupations by older adults with physical disabilities. *Scandinavian Journal of Occupational Therapy*, 1-10.
- Bontje, P., Asaba, E. & Josephsson, S. (2016). Balancing struggles with desired results in everyday activities: strategies for elderly persons with physical disabilities. *Scandinavian Journal of Caring Sciences*, 30, 154-163.
- Bontje, P., Asaba, E., Tamura, Y. & Josephsson, S. (2012). Japanese Older Adults' Perspectives on Resuming Daily Life During Hospitalization and After Returning Home. *Occupational Therapy International*, 19, 98-107.
- Dickerson, A.E. (2000). The power and flow of occupation illustrated through scrapbooking. *Occupational Therapy in Health Care*, 12, 127-140.
- Doble, S.E. & Santha, J.C. (2008). Occupational well-being: rethinking occupational therapy outcomes. *Canadian Journal of Occupational Therapy*, 75, 184-190.
- Eide, A.H., Josephsson, S. & Vik, K. (2017). *Participation in health and welfare services: Professional concepts and lived experience*. New York: Routledge.
- Fisher, A.G. (2009). *Occupational therapy intervention process model: a model for planning and implementing top-down, client-centered, and occupation-based interventions*. Fort Collins, Colorado: Three Star Press.
- Hasselkus, B.R. (2006). The world of everyday occupation: real people, real lives. (2006 Eleanor Clarke Slagle Lecture). *American Journal of Occupational Therapy*, 60, 627-640.
- Hasselkus, B. R. (2011). *The meaning of everyday occupation*. Thorofare, NJ : Slack.
- ISOS. (Undated). Retrieved from <http://www.isocsci.org/>
- Josephsson, S., Asaba, E., Jonsson, H. & Alsaker, S. (2006). Creativity and order in communication: Implications from philosophy to narrative research concerning human occupation. *Scandinavian Journal of Occupational Therapy*, 13, 86-93.
- Jullien, F. (2004). *Treatise on Efficacy: Between Western and Chinese Thinking*. Hawaii: University of Hawaii Press.
- Jullien, F. (2007). *Vital nourishment : departing from happiness*: Zone Books The MIT Press.
- Larson, E., Wood, W. & Clark, F.A. (2003). Occupational science: Building the science and practice of occupation through an academic discipline. In Crepeau E.B., Cohn E.S. & Schell B.A.B (Eds.) *Willard & Spackman's Occupational Therapy 10th ed*. Philadelphia, PA: Lippincott Williams & Wilkins. pp. 15-26.
- Larsson-Lund, M. & Nyman, A. (2017). Participation and occupation in occupational therapy models of practice: A discussion of possibilities and challenges. *Scandinavian Journal of Occupational Therapy*, 24, 393-397.
- Molineux, M. (2011). Occupational science and occupational therapy: Occupation at centre stage. In Christiansen C.H. & Townsend E.A. (Eds.) *Introduction to Occupation: The Art and Science of Living 2nd ed*. New Jersey: Pearson. pp. 359-384.
- Njelesani, J., Tang, A., Jonsson, H. & Polatajko, H. (2014). Articulating an Occupational Perspective. *Journal of Occupational Science*, 21(2), 226-235.
- Pierce, D. (2009). Co-occupation: The challenges of defining concepts original to occupational science. *Journal of Occupational Science*, 16, 203-207.
- 坂根勇氣 & ボンジェ・ペイター (2016). 回復期リハビリテーション病棟入院中のクライアントと担当作業療法士の相互理解のプロセス. (修士論文), 首都大学東京, 東京. Retrieved from https://tokyo-metro-u.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_snippet&index_id=1444&pn=1&count=20&order=17&lang=japanese&page_id=30&block_id=155
- Stadnyk, R.L., Townsend, E.A. & Wilcock, A.A. (2011). Occupational Justice. In Christiansen C.H. & Townsend E.A. (Eds.) *Introduction to Occupation. The Art and Science of Living 2nd ed*. New Jersey: Pearson. pp. 329-358.
- 高木雅之, 岡崎ななみ, 宮脇佳奈, 棟田千比呂 & ボンジェ・ペイター (2018). 地域在住高齢者の日々の満足度に影響を与える作業経験. 投稿中.
- Townsend, E.A. & Polatajko, H.J. (2007). *Enabling occupation II: Advancing an occupational therapy vision for health, well-being & justice through occupation*. Ottawa: Canadian Association of Occupational Therapists.
- WFOT. (2012). Definition of occupational therapy. Retrieved from <http://www.wfot.org/AboutUs/AboutOccupationalTherapy/DefinitionofOccupationalTherapy.aspx>
- Wilcock, A.A. & Hocking, C. (2015). *An Occupational Perspective of Health 3rd ed*. Thorofare, NJ: Slack.
- Wong, S.R. & Fisher, G. (2015). Comparing and using occupation-focused models. *Occupational Therapy in Health Care*, 29, 297-315.
- 吉川ひろみ (2008). 「作業」って何だろう: 作業科学入門: 医歯薬出版.